vol.265

海泉池「満水石」と中門「分量石」

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲「分量石」（左側）
（上田1丁目、長尾街道南側）

▲「満水石」（右側）
（阿保4丁目、阿保公民館前）

▲海泉池と新築された阿保公民館
（平成2年6月撮影、阿保自治会提供）

上田・阿保・三宅村を結ぶ大海池用水のネットワーク

阿保神社（阿保5丁目）が水をたたえています。池は江戸時代、丹北郡西阿保村に所在していましたが、田畑を灌漑する池法り面積の約七〇％を水下である三宅村が占めていました。

海泉池は江戸時代、「かすみ池」とか「かいすみ池」と表記されることも多いのですが、「海泉」とは池底に湧水があり、大きい池を海にたとえ、その池を誉めたたえた美称だと言われています。面積は一四町六畝余（約一四三四アール）、深さ四尺（約一・二メートル）をはかっていました。

海泉池は、三宅村の大海池（三宅東1丁目）に入る用水中継池であったことから、大海池が慶長五年（一六〇〇）に完成していましたので、その時期からほどなくして掘られたものと思われます。灌漑面積は寛文四年（一六六四）時、三六町余（約三六七二アール）で、内訳は阿保村七町八反余、三宅村二五町のほか、田井城村にも三町余がゆきわたっていました。延宝年間（一六七三～八〇）には阿保村九町余、三宅村二五町余、田井城村二町余と変化しています。

江戸時代、海泉池には四つの樋があり、このうち、北堤の東端にある用水取樋は大海池へ流す樋でした。ここには、池中に満水石とよばれる水の分量、高さを定める花崗岩の角柱が建てられていました。三宅村と西阿保村の立会いのもと、文化五年（一八〇八）六月に建立されました。

正面に「海泉池満水石　西阿保　三宅　取扱人　立会居之」と刻んでいます。裏面には「文化五戊辰年閏六月」と記します。側面にまわると、満水になると、樋を抜いて水を流す印を両角まで細長く凹め、その下に「満水ヨリ七寸五分　下ケ印」とあります。海泉池に水が七〇％溜まると樋を抜く目安としたのでした。

海泉池の北堤は、長尾街道や中高野街道から、上田村・阿保茶屋村を経て別所村方面へ向かう村道として利用されていました。その上、阿保茶屋北側の地蔵堂前（阿保4丁目）に明治十五年（一八八二）九月に建てられた道標に「右八尾　信貴山」「左平野　大坂」とあるように八尾から信貴山にお参りする参詣道でもあったのです。北堤の東端には、地蔵堂をはじめ、池を守る「水光大龍王」や「池長弁財天」などの祠も祀られています。

昭和末期、海泉池の北堤東側は埋め立てられ、平成元年（一九八九）四月、阿保公民館が建てられました。それにともない、満水石も池中から移され、現在の公民館入口の東側の道路前にモニュメントとともに、保存されています。その後も、海泉池北堤側は埋め立てられ、阿保公民館に南接して、松原市民道夢館が平成十年（一九九八）にオープンしました。

それでは、海泉池へは、どこから水が流れてきていたのでしょうか。長尾街道が中高野街道と交わる阿保茶屋交差点から西へ一〇〇メートルほど行った所に、中門の分量石とよばれる花崗岩の角柱とモニュメントが建っています。海泉池の満水石と同型で、堰高を定めたものです。同地が中門とよばれるのは、五世紀前半、反正天皇のミヤコである丹比柴籬宮の中門があった場所だと伝承されているからです。

狭山池（大阪狭山市）水系の一つ、今井戸川が南方から流れ、近鉄線をくぐって長尾街道・中門で流路が東西二手に分かれます。今は暗渠になっていますが、そのうち東に向かい、阿保茶屋で北に向かって流れた水が海泉池に入るのです。分量石は、享和元年（一八〇一）七月につくられました。

表面に「字中門三宅村大海池　用水道堰樋竪樋上端　同戸堰板上端限伏方分量石　上田　三宅扱人　立会居之」とあり、裏面には「此分石長履石上端迄五尺也　享和元辛酉年七月」と刻まれています。

中門の地は、海泉池を経て大海池に入る取水掛口にあたり、水利権を持っていた上田村と三宅村の立会いのもとで、西流する水と東流する水を分量石を基準として調節したのでした。堰高を決める満水石と分量石は、今も残る貴重な文化財なのです。